

連携大会プログラム抜粋版（2017.10.2 版）

2つの主要学会の年次大会を同期間に、同場所で。130本もの研究報告。

ブラックスワンを見に来ませんか？

27-29.Oct.2017

COLLABORATION

×

SHIGA UNIVERSITY



日本保険学会・日本リスク研究学会 2017 連携大会 連携プログラム

The Collaboration annual Conference between JSIS and SRAJ in 2017

2017 年度第 72 回日本保険学会（The Japanese Society of Insurance Science：JSIS）全国大会と
第 30 回日本リスク研究学会（The Society for Risk Analysis Japan：SRAJ）年次大会との連携大会

会場：滋賀大学経済学部（彦根キャンパス）〒522-8522 滋賀県彦根市馬場一丁目1番1号

期間：2017 年 10 月 27 日（金）14：30～10 月 29 日（日）16：00

大会案内 HP：日本リスク研究学会 <http://www.sra-japan.jp/SRAJ2017HP/indexjp.htm>

日本保険学会 <http://www.js-is.org/?p=3173>

大会参加費＆参加資格：所定の大会参加費をお支払いいただければ、どなたでも参加できます（上記の HP をご覧ください）。

ただし、2017 年 10 月 29 日（日）9：00～11：15 のシンポジウム「食の安全・安心に係るリスクコミュニケーションを考える」は

市民公開講座で無料。

ご挨拶 「大会ロゴ」に込めた意味

2007年に刊行された金融トレーダーかつ数学者であるナシーム・ニコラス・タレブの著書「ブラックスワン」は、2008年のリーマンショックなど国際金融危機を予測した著作として大きな注目を浴びました。彼は「ブラックスワン」を、イギリス人がかつて見たことのない「黒い」白鳥の存在を知り衝撃を受けたことになぞらえ、「ほとんど起こりえないが、起これば大きな影響を及ぼす事象」と定義しています。

実は、この「黒い白鳥」、ブラックスワンが彦根城の中堀を悠々と泳いでいます。

でも、なぜ、オーストラリア原産のブラックスワンが、彦根城にいるのでしょうか？NHK大河ドラマ「おんな城主直虎」の主人公である井伊直虎が名門の礎を作ったのが井伊家です。その江戸幕府大老であった井伊直助は1860（安政7）年に、江戸城桜田門で水戸浪士に暗殺され、さらに1862（文久2）年には安政の大獄が起こり、水戸藩と彦根藩は宿敵の間柄となりました。

そこから約100年が過ぎた1968（昭和43）年に、「明治100年」を契機に彦根市と水戸市は歴史的なわだかまりを超えて、親善都市提携を結び、その友好の印に水戸市から彦根市に送られたのが、このブラックスワンです。

ただ、さらに、疑問は深まります。水戸市はなぜブラックスワンを所有していたのか？という点です。滋賀大学リスク研究センター発行のリスクフラッシュ第15号によれば、それは、オーストラリアのニューカッスル市と姉妹都市提携を結んでいた山口県宇部市の「ときわ公園」から、江戸時代に同じ「ときわ公園」（文字は常盤公園と書く）と呼ばれていた水戸市の「偕楽園」に2羽のブラックスワンが送られたことによります。

ということは、ブラックスワンは、スコットランド人のキャプテン・クックが1770年にオーストラリアに上陸し、初めて目にし、その約200年後に彦根市に到着し、その約50年後の2017年秋に皆様が恐らく滋賀で遭遇するまで、実に約250年の時間が流れていることとなります。

「ブラックスワン」を見に来ませんか？

でも、我々が本当に見てもらいたいのは、ブラックスワンに込めたタレブの言う「ほとんど起こりえないが、起これば大きな影響を及ぼす事象」である日本保険学会（The Japanese Society of Insurance Science:JSIS）と日本リスク研究学会（The Society for Risk Analysis Japan : SRAJ）との今回の「連携大会」です。

学会が、その最大の行事である年次大会を「同じ場所」、「同じ時間」で実施することは日本でもほとんど例がありません。互いに知らない両学会ですが、実は「リスク」で深くつながっており、共に刺激し合い、成長し合うことができます。

アカデミックな世界にいる我々が、自分の研究の世界や自分の学会に閉じこもれば、たちどころに客観性と創造性、そして研究者としての成長を失います。130本を超える報告が予定される連携大会というブラックスワンに触れ、*Jargon*を排してもらえれば幸いです。

連携大会実行委員長 久保 英也

Ⅲ. 連携大会の時間・場所プログラムマップ

会場		連携大会行事(網掛けの部分)	主に日本保険学会行事				主に日本リスク研究学会行事				共用部分				
日程		ラグーナ(カフェ)	第15号講義室 ＜144＞	ゲストルーム ＜50＞	史料館	第14号講義室 ＜100＞	第21号講義室＜70＞	第22号講義室＜70＞	第220号 室、第223 号室	第205号室	630A	第224号室 (大会本 部、事務 局)	ラグーナ (カフェ)と オープンテ ラス		
2017 年 10/27 (金)	16:00				HR5:16:00～16:45 経済学部附 属史料館見学ツアー(近江商人 資料18万点)	ゲストルーム 14:30～17:00 R2: 企画セッション「体験学習 で考えるリスク認知が保険 加入等の行動に及ぼす影 響と活用」【金 澤伸浩】	—	—			15:00リス ク学会理 事会				
	17:00～ 19:00	HR2:17:00 連携若手セッション「学会はこうなっ ていてほしい!」【村上道夫、岸本充生】 ＜コーヒー、サンドイッチ付き＞	—		17:00		—				18:00 大 会本部・事 務局				
10/28 (土)	8:30	HR3:8:30～9:20 モーニングセッション :海外ジャーナル特訓【大倉真人】 ＜コーヒー付き＞	—		—	8:30		—					8:30～ モーニング カフェ		
	9:15～		受付(データサイエンス棟2F)	9:30～10:10 保険 学会評議員会		8:45～	受付(データサイエンス棟2F)								
	10:15		10:20～10:50 総会・開会の挨拶、 (第1号議案～第7号議案)	—	—	9:00～ 10:30	C1:セッション:自動運転・移動 【小野 恭子】	B1:セッション:化学(1) 【村山 武彦】	A1:セッション:リスク社会学 【酒井 泰弘】		韓国未 賛控室				
	10:50～ 12:10		H3:招待講演「韓国保険学会の持続的成長」 【韓国保険学会会長・金憲秀氏】	—	—	10:40～ 12:50	開会の挨拶 R1:大会シンポジウム「リスクの環境変化とリ スク学の課題:リスク学事典の編集から見 てきたこと」【岸本充生】	—	—		12:15～ 12:45 保 険学会大 会企画委 員会	12:00～ 13:30 リ スク学会 編集委員 会	9:00～ 16:30コ ーヒーラ ウンジ(休 憩室)		
	12:10～ 13:10		昼 食 (生協の利用可)			12:50～ 13:30	昼 食 (生協の利用可)								
	13:10～ 16:15		H1:シンポジウム「今、学会の存続をかけた若 手研究者の育成」【久保英也】			13:30～ 15:40	R3:企画セッション「水系感染リスク研究の最 先端」【村上道夫】 (日本水環境学会と連携)	B2:セッション:化学(2) 【緒方 裕光】	A2:セッション:東日本・リスク 対話【神田 玲子】		金融庁幹 部控室				
	16:20～ 17:20		H4:招待講演「Fintech革命が保険監督、保険 業下院与える影響」【金融庁: 井上俊嗣氏】	☞懇親会会場へ移動:会場行きバス出発 時刻17:30と17:50(所要時間10分)		15:50～ 18:00	R4:企画セッション「リスクマネジメントの実務 とリスクマネジャーの10年」 【竹田直人】(日本保険学会サポート)	R5:企画セッション「リスク評価技術と 制度の連携を通じたリスク評価と評価 結果に基づくリスクガバナンス実現に 向けた提言」 島直也】 【小 志】	R6:企画セッション「リスクが 高いのはどっち?—リスク比 較のからくりを探る」【永井孝 志】						
	18:10～ 20:00		懇親会: マリアージュ彦根＜参加者目途:120名＞			18:15～ 20:00	懇親会: ゲストルーム(生協)＜参加者目途:40名＞			—	—	—	—	—	

日程/ 会場	時間	第15号講義室もしくは、第11号室・第12号室	第15号講義室	第5号講義室 ＜100＞	第6号講義室 ＜144＞	時間	第14号講義室 ＜100＞	第21号講義室 ＜70＞	第22号講義室 ＜70＞	第220号 室、第223 号室	第205号室	第224号室	ラグーナ (カフェ)	
10/29 (日)	8:45～	受付(データサイエンス棟2F)				8:45～	受付(データサイエンス棟2F)							
	9:00～ 11:15	HR1:学会連携:特別セッション 「われわれは近時のエマージングリスクにどう向き あうべきか」【吉澤卓哉】(第15号講義室)		H4:自由論議:経済・ 経営・商学系【丸山高 行】	H5:自由論議:法律 系【道山 聡】	9:00～ 11:15	R7:企画セッション「食の安全・安心に係るリ スクコミュニケーションを考える」 【関澤 純】＜市民公開講座＞	B3:セッション:防災 【臼田 裕一郎】	A3:セッション:リスク管理 【島田 洋子】			大会本部 事務局		
	11:20～ 12:25	HR4:ポスターセッション:ポスタービューイング(第 11号室、第12号室)	(HR4):ポスターセッション:ポスタービューイング(両学会の合同ポスター報告)			11:20～ 12:40	(HR4):ポスターセッション:ポスタービューイング(両学会の合同ポスター報告)				ポスター展 示	12:20～13: 20 2018年次大 会実行委員 会打ち合わ せ		9:00～ 15:00コ ーヒーラ ウンジ(休 憩室)
	12:25～ 13:00	昼 食 (お弁当準備:事前予約)				12:40～ 13:20	昼 食 (お弁当準備:事前予約)							
	13:00～ 15:40		H2:共通論議 「自動運転が引き起こす保険業 界の変貌とその対応」 【石田成則】	—	—	13:20～ 15:30	R8:企画セッション「リスク学と科学技術社会論 の間をつなぐ」【岸本充生】(科学技術社会 論学会と連携)	R9:企画セッション「リスクコミュニ ケーションが消えた」【竹田直人】	A4:セッション:商学リスク 【片谷 教孝】		14:00リス ク研究学 会表彰委 員会	13:00保 険学会ポ スター— 優秀発表 委員会		
	15:40～ 16:00		表彰式と閉会式	—	—	15:35～ 16:15	表彰式と閉会式				—	—	—	—

(注) 【 】は、代表者、座長、司会者を表す。< >は3名席を2名で使用した時の定員。

IV. 連携大会プログラム一覧

IV-1プログラム一覧(1) 総括表 「Jargonを排して」

プログラム 番号	保険：日本保険学会 リスク：日本リスク研究学会	テ ー マ	代表者・座長	所属(略称)	含まれる 報告数	日時	場所
H1	学会シンポジウム(保険)	「今、学会の存続をかけた若手研究者の育成」	久保英也	滋賀大学	4	28日(土):13:10～16:15	第15講義室
H2	学会シンポジウム(保険 共通論題)	「自動運転が引き起こす保険業界の変貌とその対応」	石田成則	関西大学	4	29日(日):13:00～15:40	第15講義室
R1	学会シンポジウム(リスク)	「リスクの環境変化とリスク学の課題—リスク学事典の編集から見えてきたこと」	岸本充生	大阪大学	4	28日(土): 10:40～12:50	第14講義室
HR1	連携シンポジウム:(保険、リスク)	「われわれは近時のエマージング・リスクにどう向きあうべきか」	吉澤卓哉	京都産業大学	4	29日(日): 9:00～11:15	第15講義室
HR2	連携若手企画セッション:(保険、リスク)	「学会はこうなって欲しい!」	岸本充生・村上道夫	大阪大学・福島県立医科大学	7	27日(金):17:00～19:00	ラグーナ
HR3	連携スキルトレーニング:(保険、リスク)	「海外ジャーナルへの投稿のために」	大倉真人	同志社女子大学	1	28日(土): 8:30～ 9:20	ラグーナ
HR4	連携ポスターセッション:(保険、リスク)	(リスク) ポスター掲示は28日(土)9:00～29日(日)16:00、ビューイングは右記のとおり	—	—	25	29日(日):11:20～12:40	第11,12講義室
		(保険) ポスター掲示は28日(土)9:00～29日(日)16:00、ビューイングは右記のとおり(募集中)	—	—	27	29日(日):11:20～12:25	第11,12講義室
HR5	滋賀大学経済学部附属史料館見学ツアー	総合商社の源流「近江商人」を知る	堀井たまき	滋賀大学経済学部附属史料館	0	27日(金):16:00～16:45	史料館
H3	招待講演(保険)	「韓国保険学会の持続成長戦略」	金憲秀	韓国順天鄕大学	1	28日(土):10:50～12:10	第15講義室
H4	招待講演(保険)	「Fintech革命が保険監督、保険業界に与える影響」	井上俊剛	金融庁	1	28日(土)16:20～17:20	第15講義室
R2	企画セッション(リスク、保険)	「体験学習で考えるリスク認知が保険加入等の行動に及ぼす影響と活用」	金澤伸浩	秋田県立大学	3	27日(金):14:30～17:00	ゲストルーム
R3	企画セッション(日本水環境学会、リスク)	「水系感染リスク研究の最先端」	村上道夫	福島県立医科大学	3	28日(土):13:30～15:40	第14講義室
R4	企画セッション(保険、リスク)	「リスクマネジメントの実務とリスクマネジヤの10年」	竹田宜人	製品評価技術基盤機構	4	28日(土):15:50～18:00	第14講義室
R5	企画セッション(リスク)	「リスク評価技術と制度の連携を通じたリスク評価と評価結果に基づくリスクガバナンス実現に向けた提言」	小島直也	大阪大学	5	28日(土):15:50～18:00	第21講義室
R6	企画セッション(リスク)	「リスクの高いのはどっち?—リスク比較のからくりを探る」	永井孝志	農業・食品産業技術総合研究機構	4	28日(土):15:50～18:00	第22講義室
R7	企画セッション(リスク):市民公開講座	「食の安全・安心に係るリスクコミュニケーションを考える」	関澤 純	NPO法人食品保健科学情報交流協議会	3	29日(日):9:00～11:15	第14講義室
R8	企画セッション(科学技術社会論学会、リスク)	「リスク学と科学技術社会論の関を繋ぐ」	岸本充生	大阪大学	4	29日(日):13:20～15:30	第14講義室
R9	企画セッション(リスク)	「リスクコミュニケーションが消えた」	竹田宜人	製品評価技術基盤機構	4	29日(日):13:20～15:30	第21講義室
A1	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「リスク社会学」	酒井泰弘	滋賀大学	3	28日(土):9:00～10:30	第22講義室
A2	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「東日本大震災におけるリスク対話」	神田玲子	量子科学技術研究開発機構	4	28日(土):13:30～15:40	第22講義室
A3	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「リスク評価とリスク管理」	島田洋子	京都大学	4	29日(日):9:00～11:15	第22講義室
A4	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「商学におけるリスク」	片谷教孝	桜美林大学	3	29日(日):13:20～15:30	第22講義室
B1	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「化学リスク(1)」	村山武彦	東京工業大学	2	28日(土):9:00～10:30	第21講義室
B2	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「化学リスク(2)」	緒方祐光	国立保健医療科学院	3	28日(土):13:30～15:40	第21講義室
B3	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「防災」	臼田裕一郎	防災科学技術研究所	3	29日(日):9:00～11:15	第21講義室
C1	テーマ別セッション(リスク・自由論題)	「移動リスク、自動運転」	小野恭子	産業技術総合研究所	2	28日(土):9:00～10:30	第14講義室
H4	テーマ別セッション(保険・自由論題)	「保険:経済・商学系課題」	丸山高行	住友生命	3	29日(日):9:00～11:15	第5講義室
H5	テーマ別セッション(保険・自由論題)	「保険:法律系課題」	遠山 聡	熊本大学	3	29日(日):9:00～11:15	第6講義室
報 告 本 数 計 (予定)					138		

(注1) 保険は、日本保険学会を、リスクは、日本リスク研究学会を表す。

(注2) 企画セッションとは、大会企画委員会が企画する行事とは異なり、会員自らが自主的にプログラムを提供するセッション(多くはシンポジウムの形態をとる)。

(注3) 日本リスク研究学会が毎年設定する「国際セッション」は、2018年2月に関西大学で開催される(SRAアジア大会)があるため、滋賀大会では見送り。

IV-2 プログラム一覧(2)シンポジウム、連携行事、招待講演

プログラム番号	発表テーマ名	形態	氏名	所属先(機関名:略称:注釈)
H1	「今、学会の存続をかけた若手研究者の育成」	シンポジウム	久保 英也	滋賀大学
	①シンポジウムの方向と学会の現状(問題提起)		久保 英也	滋賀大学
	②保険業界が学会に求めること		村田 毅	三井住友海上
	③他学会の若手育成の取り組み		新山 陽子	立命館大学(日本リスク研究学会前会長)
	④状況の最も厳しい関西西部会の取り組みと法律系の課題		今井 薫	京都産業大学
H2	「自動運転が引き起こす保険業界の変貌とその対応」	シンポジウム	石田 成則	関西大学
	①急進展する自動運転の現状と課題		福島 正夫	日産自動車
	②自動運転の成否を握る地図システムのリスクガバナンス		三徳 昭弘	ダイナミックマップ基盤企画株式会社
	③自動運転が保険業界に与える影響		池田 裕輔	東京海上日動
	④自動運転車の法的責任と保険法		肥塚 肇雄	香川大学
R1	「リスクを取り巻く環境変化とリスク学の課題—リスク学事典の編集現場から」	シンポジウム	岸本 充生	大阪大学
	①リスク学事典で編集で見てきたこと(問題提起)		久保 英也	滋賀大学(リスク学事典編集委員長)
	②リスクの複合化		谷口 武俊	東京大学
	③リスクの社会化、格差化		長坂 俊成	立教大学
	④SNSの拡大に伴う対話の自閉化(仮)		広田 すみれ	東京都市大学
	⑤新規リスクの同時拡大化		岸本 充生	大阪大学
	⑥リスクのグローバル化、同時化とリスク学の方向		前田 恭伸	静岡大学(日本リスク研究学会会長)
HR1	「われわれは近時のエマージング・リスクにどう向きあうべきか」	シンポジウム	吉澤卓哉	京都産業大学
	①エマージング・リスクに対する公的機関の取り組み		岸本 充生	大阪大学(日本リスク研究学会)
	②(仮)エマージングリストの管理の視点から		平井 祐介	経済産業省資源エネルギー庁(日本リスク研究学会)
	③医療技術進歩とエマージングリスク(がんの粒子線治療を例として)		重原 正明	第一生命経済研究所(日本保険学会)
	④損害保険におけるエマージングリスクへの取り組みの一例—サイバーリスクについて		石原 康史	東京海上日動(日本保険学会)
HR2	「学会はこうなって欲しい!」	連携セッション	村上 道夫	福島県立医科大学
	日本リスク研究学会/日本保険学会の若手研究者(6名)		若手研究者	現在先選定中
HR3	「海外ジャーナルへの投稿のために—保険学における国際的な研究報告の観点から」	レクチャー	大倉 真人	同志社女子大
HR4	滋賀大学経済学部附属史料館見学ツアー	施設見学、解説	堀井学芸員	滋賀大学経済学部附属史料館
H3	「韓国保険学会の持続成長戦略」	招待講演	金 憲秀、成 周昊	韓国順天鄺大学、韓国慶熙大学
H4	「FinTech革命が保険監督、保険業界に与える影響」	招待講演	井上 俊剛	金融庁

IV-3 プログラム一覧(3)企画セッション(シンポスタイル:自由論題)

プログラム番号	発表テーマ名	氏名(姓)	所属先(機関名:略称:注釈)
R2	体験学習で考えるリスク認知が保険加入等の行動へ及ぼす影響と活用	金澤伸浩	秋田県立大学
	①リスク認知と保険の関係	小山浩一	株式会社Break On Through
	②リスク認知の特徴とバイアス	田中 豊	大阪学院大学
	③リスク認知のバイアス体験	建部彰一	体験学習実践研究所
R3	水系感染リスク研究の最先端【日本水環境学会共同企画セッション】	村上道夫	福島県立医科大学
	コメンテーター	藤井 健吉	花王安全性科学研究所
	①水系感染リスクの水質管理への利用	田中宏明	京都大学
	②水系感染症のリスク評価とモデリング	渡部徹 金谷祐里	山形大学
	③感染性胃腸炎流行のリスク低減を目的とした下水中の病原ウイルス監視	三浦尚之	国立保健医療科学院
R4	リスクマネジメントの実務とリスクマネジャの10年	竹田宜人	(独)製品評価技術基盤機構/横浜国大
	①リスクマネジャの10年を振り返る(その成果、紹介)	宮崎隆介	リスクマネジャネットワーク
	②企業活動とISO31000など認証制度の活用	古沢啓一	新明和工業(リスクマネジャネットワーク)
	③保険商品を企画する際に考慮されるリスク	石原 康史	東京海上日動保険(日本保険学会)
	④新たなリスクマネジャ的人材養成のあり方と学会の役割	竹田 宜人	(独)製品評価技術基盤機構
R5	リスク評価技術と制度の連携を通じたリスク評価と評価結果に基づくリスクガバナンス実現に向けた提言	小島直也	大阪大学
	①リスク評価技術と制度の連携を通じたリスクガバナンスの実現に向けた考察	小島直也	大阪大学
	②家庭におけるマテリアルフロー・ストック由来化学物質のリスク評価:家電製品と難燃剤に着目して	Leticia Dos Muchangos	大阪大学
	③SOMIによる化学物質の分類手法に関する一考察	Zhou Liang	大阪大学
	④化学物質使用に関する空間立地特性とPRTRデータとの連携によるヒト健康影響低減シナリオの評価:ドライクリーニング店からのPCE排出を例に	Xue Mianqiang	大阪大学
R6	リスクが高いのはどっち? ～リスク比較のからくりを探る～	永井孝志	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
	①セッションの趣旨説明	永井孝志	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
	②肥満vsやせ	永井雅人	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
	③スポーツ対決	岸本充生	大阪大学
	④乗り物対決	小野恭子	産業技術総合研究所
R7	食の安全・安心に関わるリスクコミュニケーションを考える【市民公開講座】	関澤 純	NPO法人食品保健科学情報交流協議会
	①食品添加物のリスクコミュニケーション	広田鉄磨	関西大学
	②リスク認知バイアスを逆手に取ったリスクコミ	山崎 毅	NPO法人食の安全と安心を科学する会
	③豊洲移転問題をめぐるリスクコミュニケーション	関澤 純	NPO法人食品保健科学情報交流協議会
R8	「リスク学と科学技術社会論の間を繋ぐ」【科学社会論学会との共同企画セッション】	岸本充生	大阪大学
	①科学技術社会論からの話題提供①	標葉 隆馬	成城大学
	②科学技術社会論からの話題提供②	八代 嘉美	京都大学
	③科学技術社会論からの話題提供③	神里 達博	千葉大学
R9	リスクコミュニケーションが消えた	竹田宜人	製品評価技術基盤機構
	①東日本大震災を経験してリスクコミュニケーションが変わったこと、学んだこと調査の概要	松永 陽子	日本エヌ・ユー・エス
	③原子力安全における「リスクコミ」の興隆 ～電気事業者の自主的安全性向上の取り組み～	桑垣 玲子	電力中央研究所
	②健康・医療情報分野のリスクコミ～個人と集団それぞれへの取り組み～	加藤 美生	東京大学大学院医学系研究科
	④リスクをめぐる対話に辿りついた理由～リスク学辞典の検討過程から～	竹田 宜人	製品評価技術基盤機構

IV-4 プログラム一覧(4)口頭発表 (自由論題)

プログラム 番号	発 表 テーマ 名	分類	座長、主発表者	所属先(機関名:略称:注釈)
	セッションA1 「リスク社会学」		酒井 泰宏	滋賀大学
A1-1	日本人のリスクに関する各種認知の変動について	リスク社会学	村山 留美子	神戸大学
A1-2	小学校教育における環境教育の実践的研究	リスク社会学	孕石 泰孝	関西大学初等部
A1-3	評判・「風評」の経済的影響について	リスク社会学	田島 正士	京都外国語大学
	セッションA2 「東日本大震災とリスク対話」		神田 玲子	量子科学技術開発機構
A2-1	震災後の放射線リスクの住民の受け止め方の変化について- 福島県住民へのインタビュー調査 -	東日本、対話	藤長 愛一郎	大阪産業大学
A2-2	放射線影響はどう伝えられたか:3.11以降の出版動向からの考察	東日本、対話	宇野 賀津子	ルイ・バストゥール医学研究センター
A2-3	原子力発電所および放射線リスクに対する認知と情報収集行動	東日本、対話	岸川 洋紀	武庫川女子大学
A2-4	福島原発事故後の放射線に関するtwitterデータの解析:時系列イベントとの関連	東日本、対話	島居 寛之	東京大学
	セッションA3 「リスク評価とリスク管理」		島田洋子	京都大学
A3-1	どこから手をつけるか?:リスクマネジメントにおける評価関数の比較	リスク評価	前田 恭伸	静岡大学
A3-2	リスクの幅とハザードの幅	リスク評価	北野 利一	名古屋工業大学
A3-3	MeRAMとKATEとの連結による毒性値欠損物質のリスク評価	リスク評価	林 彬樹	産業技術総合研究所
A3-4	Critical Infrastructure とネットワーク理論	リスク管理	野口 寛貴	広島大学
	セッションA4 「商学におけるリスク」		片谷 教孝	桜美林大学
A4-1	近江商人系企業の存続リスクに関する調査研究:「寿命30年説」を考える	商学	曾根 秀一	静岡文化芸術大学
A4-2	「財務報告においてリスク情報をどのように表示、開示すべきか~オンバランスされる情報とそうでない情報の概念整理」	商学	上野 雄史	静岡県立大学
A4-3	人々の金融リテラシーと絶対的リスク回避度および行動選択について	商学	四塚 朋子	追手門学院大学
A4-4	企業の食品安全関連事件が株価に与える影響の定量分析	商学	竹下 広宣	名古屋大学大学院
	セッションB1 「化学リスク(1)」		村山武彦	東京工業大学
B1-1	消費者安全の視点からの化学物質管理法制度再考-ライフサイクル思考に基づく法システム構築に向けての一考察 その2-	化学	河野 真貴子	東京大学
B1-2	水俣条約支援ツールとしての水銀マテリアルフロー分析	化学	布施 正暁	広島大学
	セッションB2 「化学リスク(2)」		緒方 裕光	国立保健医療科学院
B2-1	地震災害に備えた化学物質取扱事業所における流出防護策の普及に向けた評価:淀川流域を対象としたケーススタディ	化学	豊田 真弘	大阪大学
B2-2	化学物質を扱う工場の地域対話の現状と経年変化について	化学	竹田 宜人	製品評価技術基盤機構
B2-3	化学工場における事故時の地方自治体の対応に関する現状と課題	化学	今中 厚志	東京工業大学大学院
	セッションB3 「防災」		臼田 祐一郎	防災科学技術研究所
B3-1	地震動予測地図をめぐる信頼と構成要素	防災	齋藤 さやか	東京大学大学院
B3-2	2014年の広島豪雨災害の被災者インタビューの分析	防災	川崎 梨江	広島大学大学院
B3-3	ICA-RUSでは全球規模・長期の気候変動リスクへの対処をどう論じたか?	防災	高橋 潔	国立環境研究所
	セッションC1 「移動リスク、自動運転」		小野 恭子	産業技術総合研究所
C1-1	社会調査に基づく自動運転車のリスクと便益認知	自動車、移動	柴田 清	千葉工業大学
C1-2	社会総合リスクを考慮した水素輸送事故シナリオ解析	自動車、移動	大待 達郎	広島大学大学院工学研究科
	保険(経済・経営・商学系)		丸山 高行	住友生命
H5-1	大型M&Aを活用した損害保険会社のコーポレート戦略	保険	鈴木 智弘	信州大学
H5-2	Fintecを用いた国民年金の未納率改善に向けた対応	保険	盛林 亮介	宮崎精鋼
H5-3	天候デリバティブを利用した積雪リスクマネジメントの提唱	保険	伊藤 晴祥	国際大学
	保険(法律系)		遠山 聡	熊本大学
H6-1	第三者によるモラルリスクと実質的当事者の確定	保険法	板東 大介	弁護士
H6-2	第三者のためにする生命保険契約における権利の調整	保険法	桜沢 隆哉	京都女子大学
H6-3	生命保険契約・自殺免責にかかる法制と解釈 -ドイツ法制、フランス法制からの示唆-	保険法	土岐 孝宏	中京大学

(注) プログラム番号の○印は、表彰対象者であることを示す。

IV-5 プログラム一覧(5)ポスターセッション

: プログラム番号HR4

プログラム 番号	発表テーマ名	分類	氏名	所属先(機関名:略称)	プログラム 番号	発表テーマ名	分類	氏名	所属先(機関名:略称)
①	福島県における東日本大震災前後の医療及び介護費用の変化	震災、地震	長谷川 誠	福島県立医科大学	27	主要国における個人情報保護規制の動向と保険業界の対応	社会リスク	佐藤 智行、牛窪賢一、金菜穂ほか	損害保険事業総合研究所
②	福島県における様々なリスクへの不安と放射線リスク認知との関連	震災、地震	鈴木 聡	福島県環境創造センター	②8	成年後見の社会化に関する研究 ——生命保険会社における成年後見制度の位置づけとそのあり方——	社会リスク	税所 真也	日本学術振興会特別研究員PD(上智大学)
3	自然災害の危険性等の地域特性に応じた防災対策手法推奨についての研究—ハザード・リスク・レジリエンス研究に向けて—	震災、地震	三浦 伸也	防災科学技術研究所	29	テレマティクス自動車保険について	自動車リスク	佐川 果奈美、古賀 稔章、曾 萌萌	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
④	地震災害に起因する電力供給停止による上水道システムへの影響評価	震災、地震	松浦 誠	大阪大学	30	高齢者交通事故の発生実態と損保協会の取り組み	自動車リスク	大島菜摘	日本損害保険協会
5	首都直下型地震発生時の千代田区における帰宅困難者についての基礎的考察	震災、地震	藤原 総明、矢代晴美	東京海上研究所	③1	将来の技術・社会シナリオによって変動する次世代自動車のマルチプルリスク評価にもとづく最適車種構成の考察	自動車リスク	高橋 直也	大阪大学
⑥	地震災害による化学物質流出を想定した配水システムおよび製造業における生産への影響評価	震災、地震	田淵 裕也	大阪大学大学院	32	自動運転車の社会受容性および法的責任に関する意識調査(アンケート調査)	自動車リスク	田口 京介	損保ジャパン日本興亜
⑦	労働生産性を考慮した慣行栽培・有機栽培におけるライフインパクトの比較	食品	程 藍	大阪大学	③3	リスクトレードオフ事例の暴露、被害人口に着目した類型化	リスク評価、管理	中塚 雄太	大阪大学
⑧	農業登録合理化に向けた農作物分類手法の検討	食品	伊香 慶彦	大阪大学大学院	34	蛍光灯からLED照明への代替に伴うリスクトレードオフ評価	リスク評価、管理	吉増 純弥	大阪大学大学院
⑨	環境水における薬剤耐性菌の存在実態	食品	五味 良太	京都大学	35	「Jupyter Notebook」を用いた研究データのリスク管理の検討	リスク評価、管理	渡邊 優香	九州大学
10	食品中の放射性物質のリスク認知と消費者の態度	食品	熊谷 優子	国立感染症研究所	36	d4PDF(将来の様々な雨を予測した実験データ)を使用した将来気候下における荒川流域での洪水リスクの確率的評価	リスク評価、管理	永野 隆士	東京海上研究所
⑪	消費段階での食品廃棄物の発生抑制を通したごみ質・量の変化推計と処理システムの比較評価	食品	上林 建貴	大阪大学	37	確率論的手法に基づく水災モデルの開発(その1)「モデルの構成」	リスク評価、管理	村田 毅、河辺 賢、堀江 啓	三井住友海上、インターリスク総研、インターリスク総研
12	製品由来化学物質の室内消費者暴露特性の推算モデルを用いた評価	化学	青木 幸生	兵庫県立健康生活科学研究	38	確率論的手法に基づく水災モデルの開発(その2)「降雨モデル」	リスク評価、管理	波多江 健、中西 翔、堀江 啓	三井住友海上、インターリスク総研、インターリスク総研
13	室内製品暴露評価ツール(ICET)による推定皮膚移行率の実測値との比較	化学	堀原 秀夫、東野晴行	産業技術総合研究所	39	確率論的手法に基づく水災モデルの開発(その3)「水文・水理モデル」	リスク評価、管理	内田 裕司、久松 力人、堀江 啓	三井住友海上、インターリスク総研、インターリスク総研
⑭	化学物質適正管理のための化学物質分類とリスク評価優先順位付与	化学	高橋 宏輔	大阪大学	40	環境リスク管理の現代的課題—現代保険学との接点—	リスク評価、管理	田島 正士	京都外国語大学
⑮	化学物質関連法における逐条解説の位置付けと法律解釈の変遷に関する考察—化審法を例に—	化学	井上 知也	みずほ情報総研株式会社	41	ベシックプラスシリーズ『リスクマネジメント』について	リスク評価、管理	山崎 尚志、柳瀬 典由、石坂 元一	神戸大学大学院、東京理科大学、福岡大学
⑯	PBPKモデルを用いた体内動態調整係数過小評価物質の抽出方法の構築	健康	佐藤 尚機	大阪大学大学院	42	日本の生保の健全性指標比較から見た中国の健全性監督への示唆	健全性リスク	王美	三井住友海上
⑰	国際化と気候変動に伴うデング熱由来のヒト健康リスクの定量的評価	健康	住田 敬太	大阪大学	43	IAA Risk Book について	健全性リスク	重原 正明	第一生命経済研究所
18	大学生の病気・ケガ・事故	健康	藤本 昌、堀谷 清美、平岩 由裕	全国大学生協共済生活協同組合連合会	44	生協共済研究会における共済研究のテーマと成果	保険・年金リスク	小塚 和行、岡田 太、江澤 雅彦	生協総合研究所、日本大学
19	環境政策に対する人々の意識とミクロ・マクロ・メゾループの関係について	環境	吉田 悦子、阿久津好明	東京大学大学院	45	国民年金の未納率分析とその改善にむけたFintecの活用	保険・年金リスク	盛林 亮介	宮崎精鋼株式会社
20	愛知川における土砂移動動態から考えるアユ・ビワマスの生息環境リスク	環境	水野 敏明	琵琶湖環境科学研究所センター	46	『社会保障と協働できる企業年金をめざして』 —企業年金の現状と機能強化—	保険・年金リスク	江瀬 剛	日生協企業年金基金
21	生物多様性条約名古屋議定書に関わる遺伝資源取り扱い研究者のリスクマネジメント	環境	岡田 祥宏	筑波大学	47	アンケートデータの分析による農村部における生命・損害保険(共済)の利用状況	保険・年金リスク	岩井 信幸、万木 孝雄	無所属、東京大学 農学生命科学研究科
22	環境リスクファイナンスの提案	環境	久保英也	滋賀大学	48	第三者によるモラルリスクと実質的当事者の確定	保険法	板東 大介	宮崎総合法律事務所
23	環境法の視点から見た保険の役割	環境	吉田 朗	早稲田大学大学院	49	傷害保険における原因事故の捉え方について	保険法	吉澤 卓哉	京都産業大学
24	地方崩壊リスクと地方創生(CSRとCSV)	社会リスク	中塚 啓二郎	東京海上日動	⑤0	生命保険の保険金受取人を「相続人」とした場合の保険法上の論点	保険法	原 弘明	関西大学
25	「今年のリスク」を選ぶ:「今年のリスク」選定タスクグループ	社会リスク	岸本 充生	大阪大学	⑤1	フランスにおける保険契約の定義問題	保険法	松田 真治	帝京大学
26	生命保険協会の事業活動の紹介	社会リスク	白岩 剛	生命保険協会	52	「他保険の告知義務」「保険法における重過失の意義」などの研究紹介	保険法	清水 太郎	沖縄国際大学

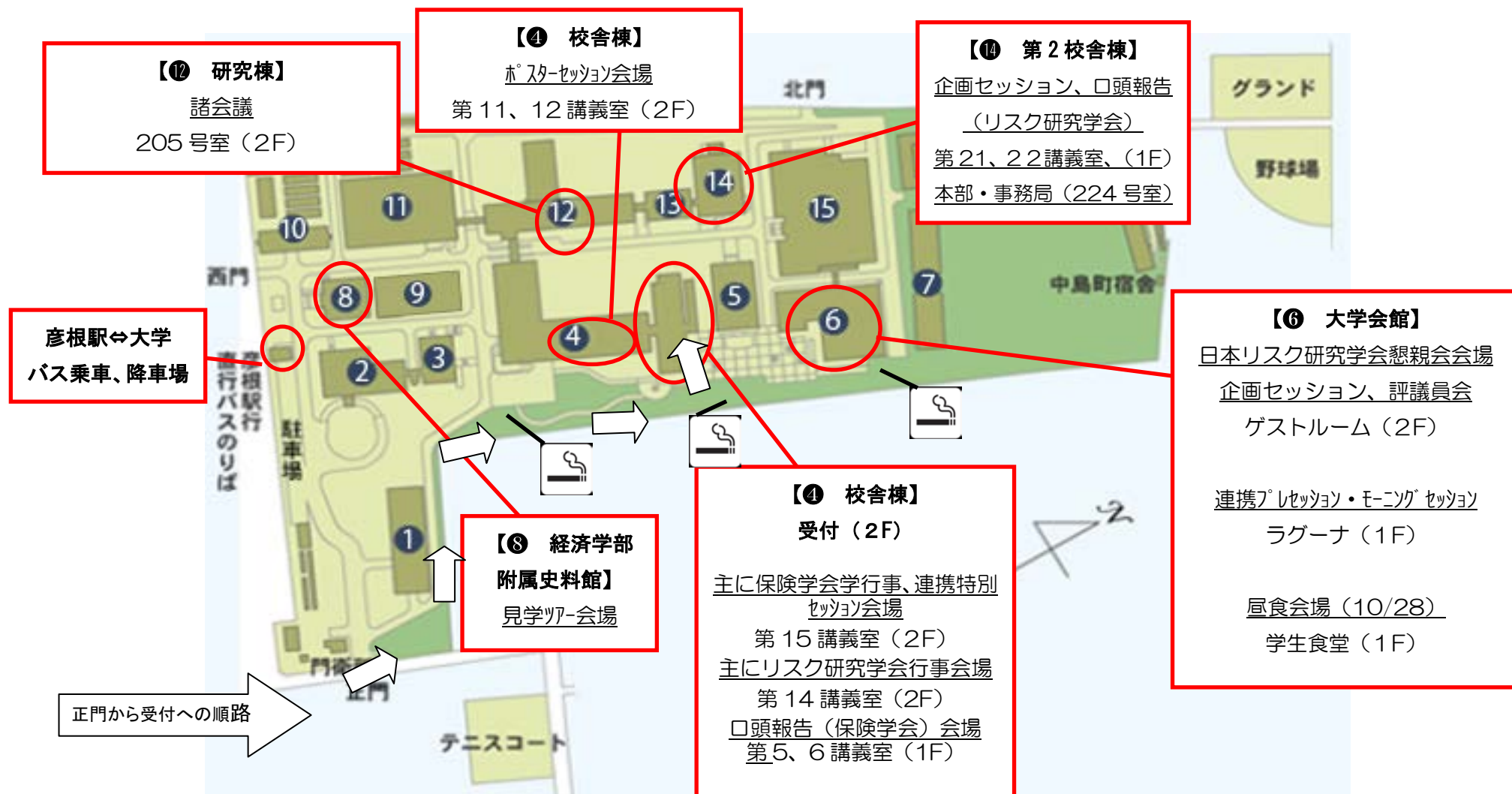
(注1) ハイライト無しが日本リスク研究学会会員、ハイライトが日本保険学会会員、による。(注2) プログラム番号欄の○印は表彰対象者。

V. 大会会場案内 1. 滋賀大学経済学部 彦根キャンパス アクセスマップ

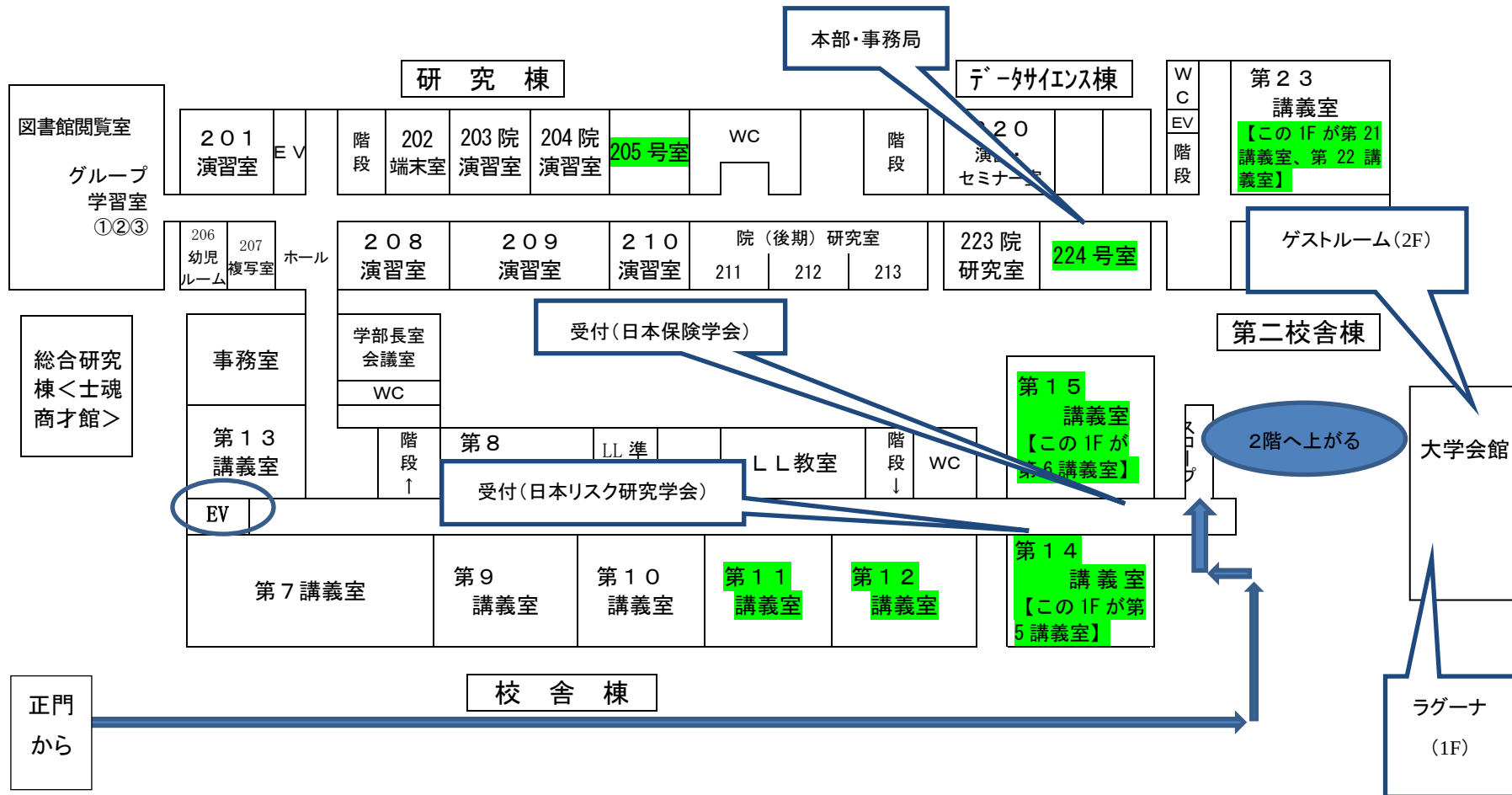


- ① 東海道新幹線「米原駅」下車、JR 琵琶湖線に乗換え京都方面に1駅「彦根駅」下車。大阪、京都⇒彦根（新快速：各50分、80分）。
- ② JR彦根駅から徒歩25分、タクシー10分。米原駅からタクシー15分。
- ③ 土曜日は大学バス有り：http://www.shiga-u.ac.jp/information/info_campus-access/info_campus-access_bus-timetable/。

2. 滋賀大学経済学部 彦根キャンパス キャンパスマップ



3 メイン会場（2階）の細部配置図



○主要プログラムのご案内

シンポジウム (1)

プログラム番号 R1 10月28日 (土) 10:40~12:50 第14号講義室

「リスクを取り巻く環境変化とリスク学の課題—リスク学事典の 編集現場から」

企画者： 大会実行委員会

司会： 岸本充生（大阪大学）

話題提供者

久保 英也（滋賀大学）
谷口 武俊（東京大学）
長坂 俊成（立教大学）
広田 すみれ（東京都市大学）
岸本 充生（大阪大学）
前田 恭伸（静岡大学）

概要：

30周年記念事業の一つとして、「リスク学事典」の刊行を2017年6月の総会でアナウンスさせていただきました。現在、事典の編集作業を鋭意進めていますが、その目次構成を検討する過程において、リスクを取り巻く環境の変化が思いのほか大きく、リスク学に突きつけられた課題が山積していることを認識させられました。

そこで、多々あるリスクを巡る環境変化について、代表的なものを「〇〇化」として取り上げ学会員全員で認識していただくと共に、その変化にリスク学がどう対応していくべきかを議論したいと考えています。

「リスク学事典」の内容について、150名にもおよぶ執筆者も含め、学会全体で議論することは、時間的・空間的な制約から難しいのですが、年次大会のメイン行事であるシンポジウムにおいて、そこに通底する、また、リスクを取り巻く環境の変化とリスク学やそれを動かすエンジンである日本リスク研究学会の進むべき方向を存分に議論したいと思います。

- ① 「事典の編集で見えてきたこと（問題提起）」：久保
- ② 「複合化」：谷口
- ③ 「社会化・格差化」：長坂
- ④ 「対話の自閉化・分断化」：広田
- ⑤ 「情報技術化」：岸本
- ⑥ 「グローバル化」, 「リスク学の方向」：前田

今、学会の存続をかけた若手研究者の育成

企画者： 久保 英也（滋賀大学）

司会： 久保 英也

話題提供者（順不同）

今井 薫（京都産業大学）

村田 毅（三井住友海上保険）

新山 陽子（立命館大学）

久保 英也

概要：

本来であれば、保険学喫緊の学術課題をシンポジウムのテーマとして取り上げたかったが、それを許さない学会の事情からテーマを「若手研究者の育成」とした。

2017年7月末の日本保険学会員909名のうち、大学教員研究者は約3割の282名である。これに対し、将来学会を支えるであろう40歳未満の同会員数はわずか40名（全体の14%）と現在の学会の主力層でパーマネントのポストを有している可能性の高い54~65歳の会員数（本来的にはこの会員数を超える若手が欲しい）69名の58%に過ぎない。

「若手を育成しろと言われても、育てる若手がない」との声を時折耳にするが、その直感を数字は冷徹に表している。この事態が、日本全体の大学の学部学生数が2017年は258万人と過去最高を更新する中で、生じているところに大きな課題がある。

とりわけ、大学教員会員の7割を占め、研究活動の国際化と分野のボーダレス化により優秀な研究者を分野や国を問わず採用する「経済・商学分野」の現状はより厳しいものがある。ただ、法学分野も法科大学院シフトの中で、若手研究者育成機能が大きく低下している点では、状況は同じである。

このシンポジウムを機に、まずは、この深刻な事態を学会員全員で共有し、若手会員の育成に向けた具体的な取り組みを真摯に議論し、実際に行動を起こす一歩としたい。

- ① 「シンポジウムの方向と学会の現状（問題提起）」：久保
- ② 「状況の最も厳しい関西支部の取り組みと法律系の課題」：今井
- ③ 「保険業界が学会に求めること」：村田
- ④ 「他学会の若手育成の取り組み」：新山【日本リスク研究学会 前会長】

自動運転が引き起こす保険業界の変貌とその対応

企画者：日本保険学会大会実行委員会

司会：石田成則（関西大学）

話題提供者：

福島正夫（日産自動車）

三徳昭弘（ダイナミックマップ）

池田裕輔（東京海上日動）

肥塚肇雄（香川大学）

概要：

内閣府が主導する SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）自動走行システム開発計画においては、①交通事故の低減、②渋滞の解消や運転者の負担軽減、③次世代交通システムの実用化、などの目標が掲げられている。

確かに、自動運転は交通事故や渋滞緩和に大きく貢献する技術ではあるものの、高いレベルの自動運転の実現には未だ課題が多く、万一の事態へのシステム上の対応などの課題も残されている。しかし、現状の課題に対処するために必要以上の規制が掛けられることや、国際標準から乖離することになれば、新たな技術開発への支障となり、その技術が持つ可能性と効用を大きく減殺することになりかねない。そこで、こうした産業革命的新技術のリスクをコントロールしつつ、社会インフラを変革し社会的利益を最大化する未来図について考えることを共通論題のテーマとする。

そこで、まず、マスコミや情報誌に登場する過大な期待・夢物語や逆に過度な懸念・見聞を排し、現在の自動運転技術のありのままの状況を把握する。とくに、自動運転技術のコアである、認知（センシング技術）、判断（人工知能技術）に加え、社会の新たなインフラとなる 3 次元地図システム（ダイナミックマップ）について、わかりやすく解説し、併せて問題点や課題を提起する。論点は、

- ① 自動走行に関する安全と安心の基準（リスク評価）をどのように設定し、新技術から生じるベネフィットとコストのバランスをどうとるのか？
- ② 自動運転車とダイナミックマップが生み出す大量のビックデータの活用、たとえば事故防止システムの開発など自動運転に伴う付加価値の可能性について検討する。
- ③ 自動走行技術による自動車損害賠償保障法（自賠法）への影響と自動走行の実現に向けた自動車保険、製造物責任保険などの新たな保険商品化の課題と展望。
- ④ 新技術に追いついていない法制度（自賠法、保険法、個人情報保護法など）があるとすれば、それにどう対応すべきか。

われわれは近時のエマージング・リスクにどう向き合うべきか

企画者：連携大会実行委員会

司会：吉澤卓哉（京都産業大学）

話題提供者：

岸本充生（大阪大学）
石原康史（東京海上日動火災保険）
重原正明（第一生命経済研究所）
平井祐介（資源エネルギー庁）

概要：

日本保険学会と日本リスク研究学会による共同セッションは初の試みである。両学会は、リスクおよびリスクに対する対処を取り扱う点において共通性を有している。けれども、両学会共に所属する会員が僅かながら存在するものの、学会間の直接的な交流は従来なかった。

本セッションでは、両学会共通の課題であるエマージング・リスクを取り上げる。特に近時において、エマージング・リスクへの内容や対処方法に関する研究が求められていると考えられるからである。

セッションの全体構成は次のとおりである。

- ① エマージング・リスクとは何か？（吉澤）
- ② エマージング・リスクの特徴と近時の傾向（吉澤）
- ③ 近時のエマージング・リスクの概観（吉澤）
- ④ 海外における国家的な取組（岸本）
- ⑤ 財産リスクに関するエマージング・リスクの例（石原）
- ⑥ 人リスクに関するエマージング・リスクの例（重原）
- ⑦ 上記⑤⑥に対するコメント（平井）
- ⑧ ディスカッション（全員）
- ⑨ フロアとの対話

なお、セッションの時間が限られていることから、上記①～④については学会ウェブサイト (<http://www.js-is.org/?p=3173>) に掲載されている全体要旨に譲ることとし、当日のセッションでの説明は簡略化する（したがって、当日のセッションの中心は上記⑤以下となる）。

両学会が連携して行うプログラム（1）

プログラム番号 HR2 10月27日（金）17：00～19：00 カフェ・ラグーナ

学会はこうなって欲しい！

企画者： 岸本充生（大阪大学）

司会者： 村上道夫（福島県立医科大学）

話題提供者 日本リスク研究学会と日本保険学会の若手研究者（7名程度）

概要：

今大会の主要テーマである「若手研究者の育成」を若手研究の目線から、若手研究者が集う学会の姿を自在に議論してもらう企画です。まず、両学会の若手研究者（各3～5名程度）から、①日本保険学会/日本リスク研究学会に参加し感じていること、②参加する際に期待したこと、③入ってみて違ったこと等を語ってもらい（放談）、そのギャップを埋めるためのアイデアを出し合うとともに、これなら自分も活躍したいと思う学会像を考えます。

また、会場の参加者全員が自在に議論に参加し、この場を両学会の研究者が接点を持つ交流の場とします。

若手研究者の方のみならずベテランの研究者の方々にも今後の若手育成を考える際に重要な示唆があると思います。

なお、開始時間が遅いことから、このセッションでは、会場でサンドイッチとコーヒーが無料提供されます。

両学会が連携して行うプログラム（2）

プログラム番号 HR3 10月28日（土）8:30～9:20 カフェ・ラグーナ

海外ジャーナルへの投稿のために―保険学における国際的な研究報告の 観点から

講師： 大倉真人（同志社女子大学）

保険の経済・商学分野やリスク研究分野では、海外ジャーナルに論文が掲載されることは研究者としての重要な実績となり、大学教員への求職や大学内での昇格に必須の要件となってきました。

また、海外ジャーナルに自分の論文が掲載されることにより、海外の研究者や大学、学会と接点ができることもあり、研究者のみならず、実務家にとって仕事のネットワーク拡大に大きな武器となります。

ただ、そこに掲載されるには、国内での論文投稿とは異なるハードルがあるため、それを突破するスキルも必要になります。そのスキル獲得の一助とするため、このセッションをご利用ください。

開始時間が早いことから、参加者にはコーヒーを無料提供いたします。

両学会が連携して行うプログラム (3)

プログラム番号 HR5 10月27日(金) 16:00～16:45 附属史料館

滋賀大学経済学部附属史料館見学ツアー。

企画者：連携大会実行委員会

案内：堀井たまき（滋賀大学経済学部附属史料館）

概要：

滋賀大学経済学部附属史料館は、伊藤忠商事、丸紅、大丸などのルーツである近江商人に関連する古文書 17.6 万点を所蔵する日本で最大の史料館です。また、民俗資料も約 1,000 点を数え、行政(高札等)、経済(含藩札等)、宿駅、度量衡(秤・枰等)、商業、手工業製品(武佐墨・湖東焼等)、農具、生活民具、信仰、教育用具などが展示されています。

近江商人は、①同郷のネットワークと②行商の情報力、③リスクを恐れない気概、を武器に、近江八幡（蚊帳，畳表），日野（売薬），五箇荘（呉服，太物），長浜（ちりめん，肥料）などの産物を扱い、全国で商権（販売代理）を握るというビジネススタイルが特徴でした。また、金貸業や海運（菱垣廻船）業にも進出し、全国的な商いを展開しました。

特徴的なことは、お客様に喜んでもらうことに加え、社会貢献ができてこそ良い商売であるとするソーシャルマーケティングの視点を当時から有していたことです。

「売り手よし 買い手よし 世間よし」の いわゆる「三方よしの精神」に、触れていたきたいと思います。

なお、参加ご希望の方は、当日 15:50 に、資料館前にご集合ください（案内の担当者がお待ちしております）。館内は史料館専任の学芸員がご案内いたします。

また、内部を解説なしに自由に見学したいという方は、金曜日の 9:00～14:30 については、入館が可能です。



当館所蔵：琉球貿易図屏風（19 世紀作）

体験学習で考えるリスク認知が保険加入等の行動に及ぼす影響と活用

企画者： 金澤伸浩 秋田県立大学システム科学技術学部准教授

司会： 金澤伸浩（秋田県立大学）

話題提供者： 金澤伸浩

田中 豊（大阪学院大学）

小山浩一（ブレーク・オン・スルー）

内藤博敬（静岡県立大学）

建部彰一（体験学習実践研究所：くじらぼ）

概要：連携大会にふさわしく、保険研究とリスク研究との接合を企図している。

日本リスク研究学会のリスク教育タスクグループでは、リスク概念の理解と普及を目指した参加体験型のリスク教育プログラムの制作を行っている。その制作プログラムの一領域には、リスク認知の理解がある。人が認知するリスクは、その人を取り巻く環境や心理的要因特性などにより、科学的な確率から推定される現実のリスクとは乖離することが多くある。これは、一般市民のみならず専門家において生じる現象であり、リスク認知のプロセスやバイアスがかかる現象を理解することは、人が合理的意思決定を行えるようにするために有用と考えられる。

例えば、住宅が損傷するリスクは、立地条件や住宅の品質が大きく影響するが、住宅の地震保険の加入件数は大きな地震が生じた後に増加する傾向が見られる。これはリスクが確率論的に認知されていないことを示唆し、この現象を逆手にとった保険商品を売ることができる一方で、リスクを正しく理解する方法を学ぶことは、正当で合理的な商品の購入、公平で合理的な行政の施策決定などに役立つと思われる。

本企画セッションでは、リスク認知のバイアスが誰でも体験的に理解できることを実体験した後、リスク認知の特徴とバイアスの要因についての整理、リスク認知と保険加入行動の関係などについて講話で整理する。また、グループディスカッションでリスク認知が行動に影響を与える事例、リスク認知の測定方法などについて話し合い、気づきやアイデアを共有する。一方的に話を聞くのではなく、参加者全員が議論に加わり意見を共有しながら理解を深めたい。

なお、参加ご希望の方は、人数把握のため、事前に kanazawa@akita-pu.ac.jp（担当：金澤）までご一報をお願いいたします。（定員30名とさせていただきます。）

- ① 体験学修「リスク認知のバイアス体験」 : 金澤, 内藤, 建部
- ② 話題提供「リスク認知の特徴とバイアス」 : 田中
- ③ 話題提供「リスク認知と保険加入行動の関係」 : 小山
- ④ グループディスカッション : 建部, 金澤

水系感染リスク研究の最先端【日本水環境学会共同企画セッション】

企画者： 村上道夫（福島県立医科大学）

司会： 村上道夫

話題提供者： 田中宏明（京都大学）

渡部徹，金谷祐里（山形大学）

三浦尚之（国立保健医療科学院）

コメンテータ：藤井健吉（花王）

概要：

日本リスク研究学会は学際性の高い学会であり，様々な分野のハブとしての機能を持つ。他学会との交流や協働を行い，学際性や俯瞰性を高めるとともに，個々の学術分野のさらなる深化に貢献することは日本リスク研究学会に期待される役割の一つであろう。

本企画は，日本水環境学会から後援を得て行う共同セッションである。水環境に関連するリスクには，水道水や環境中の化学物質による健康リスクや生態リスクなどがあり，これまでに日本リスク研究学会でもさまざまな発表がされてきたが，水中の健康関連微生物リスクについては，日本リスク研究学会との接点が比較的少なかった。そこで，本企画セッションでは，水系感染リスクをテーマとする。水系感染リスクには，そのリスク評価，その管理，社会におけるコミュニケーションなどに関する知見があり，本企画セッションでは，それらの最新の研究事例を日本水環境学会の会員であり，本分野の最先端の研究者からご紹介いただく。

京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻の田中宏明氏からは，水系感染リスクに関する管理方法や基準について紹介していただく。山形大学農学部食料生命環境学科の渡部徹氏，金谷祐里氏からは，リスク評価の事例とそのモデリング解析による研究事例を紹介していただく。国立保健医療科学院生活環境研究部の三浦尚之氏からは，下水中の病原ウイルスの測定データをもとにした警報システムを用いた社会とのコミュニケーションについて発表いただく。また，花王安全性科学研究所の藤井健吉氏にコメンテータをお願いした。

本企画セッションを通じて，水系感染リスクの分野は，化学物質や放射線といったヒト健康に関連した分野との共通点や相違点があり，水系感染リスク分野を学ぶのみならず，様々な分野におけるリスク学の特性を見直す機会にもなろう。会場とのディスカッションの時間も多くとり，高い学際性に支えられた双方向的で建設的な議論の場としたい。

- ① 「水系感染リスクの水質管理への利用」：田中
- ② 「水系感染症のリスク評価とモデリング」：渡部，金谷
- ③ 「感染性胃腸炎流行のリスク低減を目的とした下水中の病原ウイルス監視」：三浦

リスクマネジメントの実務とリスクマネジャの10年

企画者：竹田宜人（独）製品評価技術基盤機構/横浜国立大学

司会： 竹田宜人

話題提供者：宮崎 隆介（リスクマネジャネットワーク）

古沢 啓一（リスクマネジャネットワーク/新明和工業）

石原 康史（東京海上火災保険）

竹田 宜人

概要：

企業活動において対応すべきリスクは確実に増大している。法定事項を遵守することは当然のことであるが、これまで企業経営におけるリスクとは意識してこなかったリスクも顕在化してきている。リスクには、内部要因によるリスクと外部要因によるリスクがある。

前者は、社内不祥事など事象としては目新しくない事案であっても、ネット上での拡散や炎上など、過去に比べると情報の拡散の速度や範囲が早くなり、その影響範囲の把握が難しくなっている。

本セッションでは、保険業界において、新規リスクを検討しつつ、新たな商品開発に取り組む東京海上日動火災株式会社の石原康史氏と企業活動においてリスクマネジメントの実務に携わる新明和工業（株）古沢啓一氏に現場の声を戴く。

また、その企業のリスクガバナンスにおいて、必要とされるリスクマネジメントに関する知識や経験を保証する資格リスクマネジャの有資格者の団体である（一社）リスクマネジャネットワーク代表理事の宮崎隆介氏にリスクマネジャ制度の社会的意義を伺う。

最後に、総括として竹田から企業のリスクガバナンスにおいて必要な人材のスキルと教育のあり方やリスクマネジャの社会的な役割や機能、今後目指すべき方向性などについて、講演者と参加者全体でディスカッションを行いたい。

- ① 「リスクマネジャの10年を振り返る（その成果、紹介）」：宮崎
- ② 「企業活動とISO31000など認証制度の活用」：古沢
- ③ 「新たなリスクに対応する損害保険の新商品開発について」：石原
- ④ 「新たなリスクマネジャ的人材養成認定のあり方と学会の役割」：竹田

リスク評価技術と制度の連携を通じたリスク評価と評価結果に基づくリ

スクガバナンス実現に向けた提言

企画者：小島直也（大阪大学、「評価技術と制度の連携を通じたリスクガバナンス」研究会）司会：
小島直也

話題提供者：小島直也（大阪大学）

Leticia Dos Muchangos（大阪大学）

Zhou Liang（大阪大学）

Xue Mianqiang（大阪大学）

概要：

日本の化学物質管理そして環境リスク管理は、物質や製品の流れを制御する制度と、リスク評価技術の連携を通じて、進められてきた。この基本的枠組みを構成するとして、化学物質排出把握管理促進法（化管法）および化学物質審査規制法（化審法）が挙げられる。化管法では、事業者による化学物質の自主的な管理の改善促進を一目的としており、具体的な取り組みとしては、事業者から化学物質の環境への排出量、性状、及び取扱いに関する情報の提供が行われている。化審法では、人の健康及び生態系に影響を及ぼすおそれがある化学物質による環境の汚染を防止することを一目的としており、具体的な取り組みとしては、新規化学物質に関する審査及び規制、上市後の化学物質に関する継続的な管理措置、化学物質の性状等に応じた規制が行われている。ただ、両者を共通の枠組みで検討する必要がある。

そこで、筆者らは評価技術と制度の連携を通じたリスクガバナンスの枠組みについて考察を進めてきた。

本研究の目的は、第1に、製品類型化に基づき代表製品を選定し、フロー・ストックに伴うリスクの評価技術を開発することである。評価にあたり、関連する制度との連携によるリスク削減効果を評価しうる枠組みとした。

第2に、代表製品に対するモデル解析結果を集約した考察の枠組みを提示することで、リスクガバナンスモデルを構築し、その導入に向けた戦略を提案する。

そして、事例解析結果、ならびに事例解析の集約枠組み、に対する考察を通じて、リスクの包括的管理に向けた3年間の活動の成果を提示し、フローと議論を行う。

- ① 研究全体像の説明
- ② 3つの製品類型の設定、ならびに各類型の代表的な化学物質・製品セットに対するリスク評価モデルの構築と適用結果の考察
- ③ 化学物質・製品類型化の改善に向けた統計解析、およびその考察
- ④ 化学物質管理と他施策との連携に関する考察を目的とした、土地利用計画との連携シナリオの立案、ならびにシナリオ下でのばく露リスク解析
- ⑤ 個別解析事例を集約し、複数の化学物質・製品やマルチプル・リスクを相互比較する枠組みの構築、ならびに比較枠組みに基づくリスク管理動向の考察

リスクが高いのはどっち？ ～リスク比較のからくりを探る～

企画者： 永井孝志（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）

司会： 永井孝志

話題提供者： 永井雅人（東北大学）

岸本充生（大阪大学）

小野恭子（産業技術総合研究所）

コメンテータ：村上道夫（福島県立医科大学）

概要：

わかりやすいリスク比較として、「〇〇と△△でリスクが高いのはどっち？」と示す手法がある。ところがこのようなわかりやすいリスク比較のなかにもさまざまなからくりが含まれている。リスクを確率として計算する際に分母や分子に何をもってくるか、数字の解釈の仕方等、見方を変えることでリスクが逆転することさえありうる。このあたりを議論するため、リスク同士を様々な見方から対決させて、リスク比較の解釈の仕方を議論する。なお、本企画セッションは日本リスク研究学会レギュラトリーサイエンスタスクグループが提案するものである。

本セッションで取り上げる話題は、以下の3つである：①痩せよりも多少肥満気味の方が死亡率は低いとされているそのからくりについて、②野球とサッカーのリスクについてアマからプロ、そして引退後までを多角的に見る、③自発的移動という観点からの乗り物のリスクの比較の指標について。最後にコメントとして、リスク比較をどのように伝えればよいのか、というテーマでリスクコミュニケーションの観点からコメントを頂く。

① 趣旨説明：永井（孝志）

② やせ vs. 肥満の総死亡リスク：バイアスと交絡の影響：永井（雅人）

③ 野球 vs. サッカー：スポーツをめぐるリスク：岸本

④ 乗り物対決～移動にかかわるリスクの比較：小野

⑤ コメント：村上

食の安全・安心に係るリスクコミュニケーションを考える

企画者： 関澤 純 (NP0 法人食品保健科学情報交流協議会)

司会： 関澤 純

話題提供者： 広田鉄磨 (関西大学)

山崎 毅 (NP0 法人食の安全と安心を科学する会)

関澤 純

概要：

リスクコミュニケーション過程を考察し、様々な社会集団ごとに適切なコミュニケーション手法を検討してこれを実践できるコミュニケーターを養成するプログラムの構築について提案する。社会心理学面からの一般市民が陥りやすい食品添加物などへの2者択一、情報発信者への不信などのリスク認知バイアスを踏まえ、これらを逆手にとったコミュニケーション手法とリスク情報発信者の要件について検討する。

食の安全と安心は非常にしばしば殺し文句として用いられ、都知事は卸売市場移転延期の理由に掲げた。実際は土壌汚染や環境基準に関する適切な説明の不足と関係者間のリスクコミュニケーション不備が現在の混乱の大きな要因となっている。都による東京ガス工場跡地の環境影響評価の不備と、その後の専門家による提言と現場の努力による大きな改善、さらには築地市場へ事業者の愛着と狭隘で衛生面の現状と国際的な食品衛生管理の標準化への対応と言ったリスクコミュニケーション以外の問題があり、これらを総合して問題をとらえる必要がある。最後に、社会的リスク問題で主役であるべき関係者の適切な情報を得る権利、また専門家や行政がコミュニケーションに果たすべき役割をあらためて確認、提示する。

- ① 「食品添加物に関わるリスクコミュニケーションの将来」：広田
- ② 「リスク認知バイアスを逆手に取ったリスコミ」：山崎
- ③ 「東京都卸売市場の豊洲移転問題をめぐるリスクコミュニケーションのあり方」
：関澤

科学技術社会論とリスク学を繋ぐ

企画者： 岸本充生（大阪大学）

司会： 岸本充生

話題提供者： 標葉 隆馬（成城大学）

八代 嘉美（京都大学）

神里 達博（千葉大学）概要：

科学技術社会論（STS）とリスク研究（リスク学）はともに、学際的もしくは分野横断的であるという特徴を持ち、研究の対象の多くが重なっている。2005年に出版された「科学技術社会論の技法」（東京大学出版社）では、具体的な事例分析として、水俣病、イタイイタイ病、もんじゅ訴訟、薬害エイズ、BSE、遺伝子組換え食品、医療廃棄物、地球温暖化、Winny事件が取り上げられている。すべてはある種の「リスク」がテーマであり、Winny事件以外は、リスク研究学会でもたびたび取り上げられるテーマである。人工知能（AI）をはじめとする情報技術のリスクへの関心が高まる中、Winny事件もけっしてスコープ外というわけではない。それにも関わらず、両分野のこれまでの交流は限られたものであった。

日本においては、日本リスク研究学会は1988年、科学技術社会論学会は2001年に発足している。会員数は両学会ともに600人程度で同規模である。両方の学会を知らない人にとっては、科学技術社会論学会は人文社会科学者による観念的な議論に、日本リスク研究学会は自然科学研究者による実践的な議論が多いと思われるかもしれない。確かに、同じ「科学と社会の間」を扱う場合でも、科学技術社会論学会は「トランスサイエンス」、日本リスク研究学会は「レギュラトリーサイエンス」としての側面を強調しがちである。

しかし、日本リスク研究学会でもリスクコミュニケーションの分野をはじめとして、人文社会科学系の研究発表は多く、むしろ、工学系のリスク研究者の発表をどう増やすかが議論されているほどである。STS学会でも、具体的な事例について実践的な議論がなされている事例も多い。このように、両学会はともに、科学と社会の関係を研究対象としており、互いのアプローチを学びあうことが有益なのではないだろうか。

なお、本企画セッションでは、科学技術社会論学会で活躍する若手（中堅）研究者らから自身のこれまでの研究の対象や方法論、アプローチ、リスク研究への期待などを紹介してもらい、その後、リスク研究学会の参加者からの質問などを受けつつ、両コミュニティの共通点と差異、交流のあり方、共同研究の可能性などについて、会場全体で議論を行う予定である。

リスクコミュニケーションが消えた

企画者： 竹田 宜人（PR0052） （独）製品評価技術基盤機構/横浜国立大学

司会： 竹田 宜人

話題提供者：

松永 陽子 日本エヌ・ユー・エス

桑垣 玲子 電力中央研究所

加藤 美生 東京大学大学院医学系研究科

竹田 宜人 （独）製品評価技術基盤機構/横浜国立大学

概要：

平成30年度に刊行予定の「リスク学辞典」では、リスクコミュニケーションの章が消え、「リスクをめぐる対話」として新たな章が立ち上がる。リスクコミュニケーションで括って説明するには編集委員の能力を超えたことが大きな理由であるが、東日本大震災とその後に起こっている様々な出来事が、リスコミという一つの絵で描ききれなくなっていることは事実である。リスコミ TG には様々な分野でリスコミに係る人たちが参加している。現場で活動している人も理論的に考察している人もいる。東日本大震災を経験して、それぞれが感じた変化は何か、15人に思いを聞いてみた。

- ① 「日本大震災を経験してリスクコミュニケーションが変わったこと、学んだこと調査の概要」：松永
- ② 「原子力分野における「リスクコミュニケーション」の「興隆」と課題」：桑垣
- ③ 「健康・医療情報分野のリスクコミュニケーション～個人と集団それぞれへの変わらない取り組み～」：加藤
- ④ 「リスクコミュニケーションが消えた（リスコミ TG 企画）」：竹田